

## 立命館大学入学式

2011.4.4

立命館大学長 川口清史

ご入学おめでとうございます。立命館大学は皆さんを心から歓迎いたします。

本日ここに、7,761名の学部新生、1,318名の大学院博士課程前期課程、博士課程後期課程、一貫制博士課程、修士課程、専門職学位課程の新入大学院学生を迎えることができました。

入学式に当たって、大学、学園を代表してお祝いの式辞を述べます。

新入生諸君！入学おめでとう。大学院生諸君、進学おめでとう。

また、新入生諸君をさまざまに支えてこられたご家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。子供が大学に入るということは、まだまだ経済的にも精神的にも支援は必要とは言うものの、やはり子育てのひとつの大きな山を越えるものであります。本当におめでとうございます。

また、新入生諸君の中には223名の留学生と67名の社会人のみなさんがいらっしゃいます。みなさんにとってこれからの学業は決して楽なものではないでしょうが、立命館大学は全面的に皆さんを支援いたします。私学立命館にとって、国際化、生涯学習社会の進展の中で留学生、社会人を大学に迎え、支援することは大変重要な使命であると考えています。

さて、2011年の入学式にあたって特に強調しておかなければならないことがあります。

皆さんもご承知の通り、3月11日に東北地方太平洋沖地震が発生し、日本列島に大きな爪痕を残していきました。とりわけ被害が深刻な岩手県、宮城県、福島県の3県から72名の新生が本日ここに列席しています。

この72名に限らず、今年の新入生諸君は特別な年度の入学生となりました。大津波を経験し、これからの大学生活全般にわたって、いやそれ以上にみなさんの生き方に影響を与える程の特別な課題に直面して入学することとなったのです。

それは、負わされた深い心の傷あとから立ち直り、街を復興させるということにとどまるものではありません。

生存や、人間同士のつながり、人類、社会、地球の未来そのものに対するもっと根源的な問いかけを通して、人類の新しい道りを模索する営みが必要となっているのです。

これから始まる大学での勉学をとおして、具体的に日本社会の再生に貢献できる道を模索してください。

こうした時だからこそ、みなさんは日本社会を根底から再建する特別の使命を持った人間として成長する責務と寄せられる期待を自覚してください。もちろん、その責務の果たし方は決してひとつではありません。新入生のみなさんには大いに悩み、壁にぶつかり、そしてこのことから多くのことを学んでほしいと思います。

私はみなさんが必ず、この期待にこたえてくれると確信しています。それは、みなさんが、110年をこえて営々と歩んできた、強靱なスピリットを持つ立命館の一員だからです。

もちろん、私たち立命館大学もそのことに貢献していく責任があります。私学・立命館は1900年の創立以来、社会や時代の求めに応じて有為な人材を社会へ輩出することを使命としてきました。

立命館大学は、明治2年(1869年)、戦前の日本の最後の元老であった西園寺公望が20歳の折、御所の内部、蛤御門にあった邸宅に開いた家塾「立命館」をその前身とします。

西園寺公望は明治維新から第2次大戦の敗戦直前まで、首相を2度務め、立憲政治を日本に定着させた国際的視野を持った稀有の政治家として日本の近代史に大きな足跡を残した人物です。「立命」とは、「天の命を全うする」こと、つまりは「完全に人知の及ばない状況を作り出す」ことを意味します。

それはとりもなおさず、人間のできることはすべてやりきる、ということです。ですから、「立命館」とは「天の命を全うするまでに努力をし尽くすところ」となるのです。

私はこの「立命館」という名前に誇りを持ってほしいと思います。

青年西園寺の新しい社会建設への燃えるような思いがこの名前には詰まっているのです。

創立者中川小十郎によって策定された建学の精神「自由と清新」は、今述べたような西園寺の旧体制との闘いに思いをはせると、この言葉の重い意味を理解できます。

「清新」は英語では innovation です。イノベーションは立命館の創立以来の深く刻まれた歴史的伝統です。立命館は一貫して、教学の、研究の、そして大学そのものの革新を続けてきました。

そして学問・芸術・文化・スポーツなどに秀でた多様な人材を受け入れ社会に送り出してきました。

この多様な人材の交流こそが私立学園の社会的使命であり、優位性であるといえます。

多様性が重要であるのは、危機の時代、変化の激しい時代にあつて、新しい発展の可能性は多様性の中にしか生まれてこないからです。この危機の時代にあつて、大学がなすべきことは、新しい可能性を持つ人材、新しい可能性を開く研究を進めることであり、それは多様性の中からしか生まれてこないのです。

立命館の一員となった諸君は、立命館の持つ多様性の中から新しい可能性を切り開く変革の文化、気風を、立命人の一人としてぜひ我が物にしてください。

絶えざる自己の革新への努力こそ、「立命」の名に恥じない生き方です。

立命館はこうした歴史的伝統を踏まえて、2006年『立命館憲章』を策定し、教育と研究と社会貢献についてその使命を明文化しました。

『憲章』は短いものではありませんが、よく練られ、考え抜かれた文章です。君たちの学びの指針としてしっかりと読み込んでください。

そこでは、立命館における教育の目標を「確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理を持った地球市民として活躍できる人間の育成に努める」といたしました。

君たちがこれから進んでいく社会は「知識基盤社会」と呼ばれる高度な知識や技術が要求される社会です。そこでは高度な知識が日々新たに生まれ、

また過去のそれらが次々と陳腐化していく社会です。働くことと学ぶことが一体となってもに要求されます。ある意味では大学を卒業してから本当の学びが要求される社会です。

大学での学びはまさにそうした学習社会に巣立っていくための基盤づくり、といえます。この基盤が大きく確固としたものであればあるほど社会で大きな優れた仕事につながっていきます。

学びの中でどのような力をつけるか、学士というのはどのような力なのか、社会人としてどのような力を持って大学を出て行くのか、大学で身に着けるべき competency が問われています。

私は社会人、職業人として大学を巣立っていく君たちに、大学でつけるべき学力、力量には4つの領域があると考えています。

その第1は問題を認識する力、論理的な思考力、相手の主張や立場を理解する力、自らの意見を説得する力、といった知的な人間としての基盤的な力量です。

第2の領域は、情報を手に入れ、整理し、発信するリテラシー能力です。

第3は自然や人間、社会への深い理解とそのあるべき姿・方向についての確信を持つ教養力です。さまざまに起こってくる事象に対する見識を持つことです。見識とは判断力であり、洞察力であり、かつ自らの尊厳でもあります。

見識は物事に対する深い理解と自分自身の生き方を含めた価値観が基礎にあつてはじめて生まれるものです。教養とはそうしたものにほかなりません。

そして第4が分野ごとの専門的な知識や技術、経験です。

立命館大学は自ら学ぶ学生諸君を励まし、支え、導いていく仕組みと構えを持った大学です。それは正課のカリキュラムだけではありません。多様な課外プログラム、学生自身の自主的な活動、海外への留学、など、チャレンジする学生を支えるシステムは全国の大学の中でもとりわけ進んでいると、私は自負しています。チャレンジこそ学生の特権です。

君たちの若さは、君たち自身が驚くほど急速な成長を可能にしてくれます。

そして万が一チャレンジがうまくいかなくても、再び三度のチャレンジを可能にする条件があります。

そして失敗はそれがまた君たちの人間性を深めることにつながっていきます。

君たちが大学で学び自己を創り上げていくことは君たち自身の未来を創るだけでなく、日本社会の、さらには地球と人類の未来を創っていくこととなります。

敗戦直後の廃校の危機に瀕した立命館に招かれ、長く総長をお務めになって今日の発展の基礎を築かれた末川博先生は「未来を信じ、未来に生きる」という言葉を残されました。

今、わたしたちが直面している社会もこの言葉を再びかみしめなければならない状況です。わたしたち立命館は、来るべき 2020 年を見据えた学園創造のビジョン「Creating a Future Beyond Borders 自分を超える、未来をつくる」を策定しました。そしていよいよ、この 4 月からその具体化に向けて様々な計画を始動させます。新入生諸君、今までの自分を超えて、みなさんの手で未来をつくっていきましょう。

私たち教職員、そして多くの学生諸君とともに、安全と安心と生存が保証され、平和で民主的で、そして持続可能な社会を創る人間になっていこうではありませんか。

入学、おめでとう。

以上を持ちまして、学長としての式辞といたします。